

障害に関連するマークの認知度と理解

—大学生を対象とする調査結果からの考察—

長谷川万由美

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第10号 別刷

2023年8月31日

障害に関連するマークの認知度と理解[†]

—大学生を対象とする調査結果からの考察—

長谷川万由美*
宇都宮大学共同教育学部*

移動制約者の外出・移動を容易にし、何らかの配慮が必要な状況を示すためにマーク^{注1)}が多く使われているが、マークの認知やその意味の理解が進んでいなければ目的を果たすことはできない。そこで、妊婦、障害者、高齢者等に関する15マークについて、大学生・大学院生を対象に認知と意味理解の調査を行った。本稿では障害に関連する認知と意味理解の度合いの違う3つのマークの理解のパターンについて分析するとともに、マークについて学ぶ機会の有無について整理した。マークの認知ができていても意味理解が不十分な場合があり、学校の教科等を通じたマークに関する学習も十分ではないことがわかった。

キーワード：バリアフリー、ユニバーサルデザイン、マーク、サイン

1. はじめに

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会（以下大会とする）の招致を契機として2016年に策定された「ユニバーサルデザイン2020行動計画」では、大会の開催にとどまらず、ユニバーサルデザインのまちづくりと国民の心のバリアフリーが大会のレガシーとして定着していくことが目指されていた。大会のレガシーとは開催国において、開催後も続く長期にわたる、ポジティブな影響のことである。オリンピック憲章第1章第2項では「オリンピック競技大会のよい遺産（レガシー）を開催都市ならびに開催国に残すことを推進する」と規定されている。具体的には、大会開催を通じて社会の中に構築される設備、技術、人々の心の持ちようなどを指す。

一方、インバウンドを見込んだ2016年の「明日の日本を支える観光ビジョン」では観光先進国を実

現するために、すべての旅行者が快適に旅行できるような環境づくりが急務であるとされた。これらを背景として外出・移動に関する制約をわかりやすく示すマークの整備と啓発が行われてきた。例えば2017年には日本人だけでなく外国人観光客にもより分かりやすい案内用図記号とすることを目的に、案内用図記号（JIS Z8210）の規格が見直され、外から見えにくい障害を持つことを示す「ヘルプマーク」が追加されるなどした。

このような移動制約者の外出・移動を容易にし、何らかの配慮が必要な状況を示すためのマークは2020行動計画が目指していたユニバーサルデザインのまちづくりに不可欠な要素と考えられる。しかし、それらが社会に浸透し、正しく理解されるには時間がかかる。大学生を対象とした認知や理解に関する調査としては坂下・立花（2011）があるが、調査時期が2010年と古い。そこで社会での浸透や理解の実態を明らかにするため、マークの認知と理解に関する調査を大学生を対象として2015年に行った（植田他、2016）が、その後の浸透や理解の変化を明らかにするため、同様の調査を大学生・大学院生に対して行うこととした。

2. 調査概要

本調査では筆者が2020年度に授業を担当した3

[†] Mayumi HASEGAWA*: Awareness and Understanding of Signs Related to Disability: Investigation from the Survey of University Students

Keywords: Barrier-free, Universal design, mark, sign

* Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

（連絡先：mayumit@cc.utsunomiya-u.ac.jp）

つの科目の受講生に対してweb上のアンケートフォームで「見たことがあるか」「意味を知っているか」「マーク等が示す内容」「学校での学習の有無」等について回答してもらった。さらに、マークを見たかどうかに関わらず「何を意味していると思いますか？(見たことがない人も考えてみてください。)」とマークの意味を考えて自由記述で回答してもらった。概要については表1の通りである。

表1 調査回答者の概要

大学(科目名)	実施日	回答数
A大学 (地域福祉論)	2020年12月16日~23日	121
B大学 (障害者福祉論)	2020年12月10日~30日	57
C大学大学院 (共生社会論)	2021年2月25日~3月7日	34
合計		212

3. 研究結果

2015年の調査と比較して、見たことがあると回答した人の割合が増えたのは、増えた割合が多い順に「ヘルプマーク」、「聴覚障害者標識」、「ベビーカーマーク」となっていた。また、「意味がわかる」と回答した人の割合が増えたのは、増えた割合が多い順に「ヘルプマーク」、「聴覚障害者標識」、「身体障害者標識」、「補助犬マーク」となっていた(表2参照)。

子育てに関連するマーク(ベビーカーマーク及びマタニティマーク)の理解内容についての分析は長谷川(2021)で報告した。ベビーカーマークやマタニティマークの意味についての記述の分析から、見たことがない人でもマークから意味を読み取ることが可能ではあるが、正確な意図を理解することは難しい場合があり、積極的なマークの掲示とともにその意味を知らせるための啓発活動が重要であるということがわかった。例えばベビーカーマークを見たことがあるかどうかで理解の内容が違うかについて整理したところ、マークを見たことがないと回答した人でも15.7%が「ベビーカーで利用可能」と、52.2%が「その他ベビーカーに関連」に分類される内容を記述していたことから、マークからベビーカーに関連すること、ベビーカーを利用している人に対するなんらかの配慮を表していることは読み取れていると考えられる。一方で、「見たことがある」

と回答した人でも62.5%の人には「ベビーカーをたまたまに利用できる場所や設備」という理解が十分にできていないため、マークを掲示するとともに、その意図が十分に伝わるような啓発活動が不可欠であるといえよう。

表2 認知度と意味の理解 (n=193)

	見たことがある			意味がわかる		
	2020	2015	変化	2020	2015	変化
ヘルプマーク	66.3%	20.0%	46.3%	38.7%	7.5%	31.2%
聴覚障害者標識	61.7%	45.5%	16.2%	43.9%	21.5%	22.4%
ベビーカーマーク	43.5%	28.4%	15.1%	16.0%	8.5%	7.5%
授乳シンボルマーク	20.7%	12.1%	8.6%	11.8%	4.9%	6.9%
オストメイト	31.1%	23.4%	7.7%	17.9%	11.4%	6.5%
耳マーク	16.6%	10.3%	6.3%	13.2%	3.0%	10.2%
盲人のための国際シンボルマーク	56.5%	51.9%	4.6%	41.0%	25.8%	15.2%
身体障害者標識	69.4%	66.4%	3.0%	41.5%	19.1%	22.4%
障害児バギーマーク	10.4%	7.4%	3.0%	10.4%	3.1%	7.3%
補助犬マーク	63.2%	63.3%	-0.1%	57.1%	46.7%	10.4%
介護マーク	9.8%	10.2%	-0.4%	9.9%	4.4%	5.5%
乳幼児用設備マーク	74.1%	75.2%	-1.1%	38.7%	34.0%	4.7%
マタニティマーク	92.2%	93.5%	-1.3%	59.9%	53.9%	6.0%
調乳室・授乳室・託児室等のマーク	49.2%	51.5%	-2.3%	28.3%	27.8%	0.5%
障害者のための国際シンボルマーク	94.3%	98.5%	-4.2%	68.9%	70.4%	-1.5%

(留学生については来日からの年数が浅いものが多いため、本表では2020年度の調査から留学生19人を除いた結果と比較した。出典：長谷川、2021：6)

本稿では、障害に関連するマークの中から、認知度(見たことがある)と意味理解(意味がわかる)の割合の違いに着目して、認知度・意味理解がともに高いマーク(補助犬マーク)、認知度は高いが意味理解が低いマーク(ヘルプマーク)、認知度・意味理解ともに低いマーク(耳マーク)について、どの程度趣旨に沿った理解がされるか、また誤解のパターンにはどのようなものがあるかを明らかにする。また大学入学までの教育課程でマークについて学ぶ機会があるかについて調査した結果についても整理する。

3-1. 補助犬マーク

2002年に身体障害者補助犬法が施行された。身体障害者補助犬（以下、補助犬）とは、盲導犬・介助犬・聴導犬の3種類の犬の総称で、補助犬は補助犬使用者の障害を補い、生活の一部を担う役割を果たしている。補助犬法に基づく訓練を経て認定された補助犬は以下のような認定の表示をする（図1参照）。補助犬法はこの補助犬の補助を得て使用者が社会参加をすることを促進するための法律であり、具体的には補助犬の訓練や認定、使用者に関わることを規定している。



図1 補助犬の認定の表示

この補助犬法の啓発のために厚生労働省によって作成されたのが補助犬マークである（図2参照）。補助犬マークをつける店舗はこの法律の意味を理解し、補助犬とともに利用することを歓迎するということになる。補助犬法の趣旨から、このマークがあってもなくても、補助犬とともに利用することはできるので、このマークがある店だけが補助犬の入店を許可するという意味ではないことに注意が必要である。2013年に施行された障害者差別解消法の中でも「身体障害者補助犬の同伴を拒否すること」は「不当な差別的取り扱い」とされている。



図2 ほじょ犬マーク

しかし、認定NPO法人全国盲導犬施設連合会が2019年に行った盲導犬受け入れ全国調査によると、回答者643名のうち52.3%が入店を拒否された経験があると回答しており、いまだに補助犬法の趣旨が浸透していないことが窺える（全国盲導犬施設協会、2020:3）。

今回の調査では補助犬マークについては、63.2%が見たことがあると回答しており、調査した15マークの中では5番目に高い認知度となっていた。また意味がわかると57.1%が回答しておりこれも15マーク中3番目と認知度、意味理解ともに高いという結果となった。

補助犬マークの意味についての自由記述の内容を分類した結果、90%以上が、補助犬に関連した記述をしており、マークの中に「ほじょ犬」という文字が入っていることもあり、このマークが補助犬の利用に関するマークであることは広く理解されている。ただしその内容を見てみると、「補助犬も入れます」と補助犬同伴の受け入れができるという理解が全体の62.3%を占めている。

表3 補助犬マークの理解 (N=212)

趣旨を理解 (補助犬は理解) 195人 (91.2%)	補助犬も入れます	133人(62.3%)
	補助犬を表すマーク	40人(18.9%)
	補助犬を連れている	13人(6.3%)
	補助犬を必要としている人	3人(1.4%)
	補助犬を飼っている 補助犬に協力して補助犬募集中	各1人(0.5%)
	その他	5人(2.6%)
誤解		5人(2.6%)
無回答		12人(5.7%)

前述の通り、補助犬法では、公共の施設、交通機関、不特定多数が利用するデパートやホテルなどの施設では同法で定められた補助犬（盲導犬、介助犬、聴導犬）は同伴の受け入れが義務付けられているため、このマークの有無によって、利用できるかどうかが決まるわけではない。今回の回答からは、マークがない店舗等でも同伴利用ができるという理解がされているかは疑問である。マークがなければ入店できないと受け取っている人も多いと考えられる。

3-2. ヘルプマーク

ヘルプマークは「義足や人工関節を使用している方、内部障害や難病の方、または妊娠初期の方など、外見からは分からなくても援助や配慮を必要として

いる方々が、周囲の方に配慮を必要としていることを知らせることで、援助を得やすくなるよう」^{注2)}東京都が2017年に作成したマークで、その後全国に広まった(図3参照)。



図3 ヘルプマーク

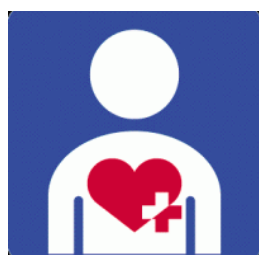


図4 ハートプラスマーク

なお、外から見えない障害を表すマークとしては、ヘルプマークのほかにも、内部障害を表すマークとして2003年にNPO法人ハートプラスの会(当時は任意団体)が考案したハートプラスマークがある(図4参照)^{注3)}。

ヘルプマークは2017年にはJISの案内用図記号となった。この5年で見かける機会も増えたためか、意味を知っている人も増え、2015年調査と比べると「見たことがある」が20.0%から66.3%へ、「意味がわかる」が7.5%から38.7%へと増えてきており、ヘルプマークがこの5年の間に浸透してきていると考えられる(表2参照)。今回の調査では見たことがあると回答した人は15のマークのうち4番目に認知度が高かったが、意味がわかると回答した人は38.7%と認知度に比して低くなっている。

ヘルプマークの意味についての自由記述の内容を分類した結果、全体の58.5%は「見えない障害や病気がある」「周囲の手助けを必要としている」などマークの趣旨を理解できている回答をしていた(表4参照)。一方、33.0%はマークの意味を誤解しており、内容としては「AEDや救命に関すること」「病院」「献血」「赤十字」などがあがっていた。その他としては「災害のある所を無償で助ける機関」

「高齢者」「状態通知マーク」「ペースメーカー」「トイレ」などの他、「臓器提供」や「健康であることを示す」という回答もあった。

表4 ヘルプマークの理解(N=212)

趣旨を理解 124人 (58.5%)	見えない障害や病気がある	65人(30.7%)
	見えない障害や病気があり助けを必要とする	25人(11.8%)
	周囲の助けが必要	24人(11.3%)
	ヘルプマークとのみ記入	7人(3.3%)
	情報タグ	3人(1.4%)
誤解 70人 (33.0%)	AED・救命	27人(12.7%)
	病院	16人(7.5%)
	その他	9人(4.2%)
	献血	8人(3.8%)
	赤十字	6人(2.8%)
無回答		18人(8.5%)

赤い地に白の十字というデザインやハートのマークがAEDや日本赤十字社など誤解されている内容に関連する他のマークとの混同を生んでいると考えられる(図5参照)。



図5 AEDマーク(左)、日本赤十字社のマーク(右)

3-3. 耳マーク

耳マークは、耳に音が入ってくる様子を矢印で示し、一心に聞き取ろうとする姿を表したものとされている(図6参照)。聞こえない人々の存在と立場を社会一般に認知してもらい、コミュニケーションの配慮などの理解を求めていくためのシンボルとして社団法人全日本難聴者・中途失聴者団体連合会が普及啓発を行っている。



図6 耳マーク

なお、聴覚障害を示すマークには国際ろう者連盟が1980年に発表した聴覚障害者のための国際シンボルマークというものもある（図7参照）。



図7 聴覚障害者のための国際シンボルマーク

今回の調査では耳マークについては見たことがあるが16.6%、意味がわかるが13.2%といずれも15のマークのうち13番目で、認知、意味理解とも低いことが明らかになった（表2参照）。

表5 耳マークの理解 (N=212)

趣旨を理解 75人 (35.4%)	聴覚障害または聴覚障害者	53人(25%)
	聴覚障害への配慮	15人(7.1%)
	耳マークとのみ記入	7人(3.3%)
誤解 85人 (40.5%)	道路や方向	47人(22.2%)
	その他の障害	21人(9.9%)
	リサイクル・エコ	7人(3.3%)
	その他	10人(4.7%)
NA、DK 52人 (24.5%)	わからない	31人(14.6%)
	無回答	21人(9.9%)

耳マークの意味についての自由記述の内容を分類した結果、趣旨を理解できていると考えられる人は全体の35.4%で、聴覚障害そのものや聴覚障害のための配慮や耳マークという名称をあげているが、全体の40.5%はマークの趣旨を誤解する回答をしていた（表5参照）。中央の矢印やその上の山型のデザインから「道路や方向」と考えたり、マークの色が緑であることから「リサイクル・エコ」と考えたりする回答が多かった。また「どんなに考えてもわかりません」など「わからない」という回答や無回答が約25%となっていた。目にする機会が少なく、直感的に意図がわかりにくいデザインから社会での浸透が十分でないことが考えられる。

3-4. 学校での学習の有無

最後に、これまでこのようなマークについて学校で学習したことがあるかを尋ねたところ「ある」と答えた人が44人(20.8%)、「ない」と答えた人が

164人(77.4%、うち留学生18人)、無回答が3人(うち留学生1人)となった。

習ったことがあると回答した人に、時期と科目を自由記述で答えてもらい、その内容を分析したところ、もっとも多いのが小学校の道徳で9人、ついで小学校の社会科、中学校の保健体育という結果となった（表6参照）。

表6 マークについて学んだ機会 (n=44)

校種	科目	人数
小学校	道徳	9人
	社会	5人
	総合	1人
	不明	2人
中学校	保健体育	4人
	家庭科、社会、道徳	各2人
	総合、英語	各1人
高校	保健体育	3人
	現代社会、家庭科	各2人
	道徳、福祉	各1人
不明	道徳	2人
	総合、保健体育	各1人
不明		5人

(複数の科目等をあげているため合計は学習したことがある人の総数とは一致しない。)

4. 考察

大学生・大学院生のマークについての理解内容を分析した結果、認知度・意味理解がともに高いマーク（補助犬マーク）、認知度は高いが意味理解が低いマーク（ヘルプマーク）、認知度・意味理解ともに低いマーク（耳マーク）の順にマークの趣旨を理解している割合が高かった。しかし、補助犬マークを「補助犬を同伴して利用可」とすることで表示がない店舗での補助犬利用が容認されないというような理解がされている可能性があったり、ヘルプマークでは色や形が似ている他のマークとの意味の混同、耳マークではデザインに起因すると思われる意味の誤解などが見られたりした。たとえ意味がわかっていると回答していても、必ずしも本来の意味を理解しているとはいえないことがわたたため、マークの認知と理解を高めるには目に触れる機会を増やすとともに、趣旨理解のための啓発活動が必要であると考えられる。

そのような機会として学校での学習があるが、今回の高校まででマークについて学んだことがあるかを聞いたのに対して、マークについて学校で学んだという回答は1/5にとどまっていた。学校教育の中でマークについて学ぶ機会がさらに増えることが必要である。

5. おわりに

今回の調査結果の分析を通じ、マークの意味を正しく理解するためには、さらに啓発が必要であること、また、学校教育で学習する機会を増やすことが啓発の一助となると考えられるが、現状ではあまりマークについて学ぶ機会がないことがわかった。

今後は3-4で挙げられた教科等の中でのマークの学習の実態を調べ、教科や発達段階に応じた指導案の提案を行うことで、マークを通じて、こころのバリアフリーに資するような教育のあり方を検討していきたい。

注1) 図記号を表す言葉としてはピクトグラム、マーク、サインなどがあるが、本稿ではマークに統一する。

注2) 東京都福祉保健局障害者施策「ヘルプマーク」から (https://www.fukushihoken.metro.tokyo.lg.jp/shougai/shougai_shisaku/helpmark.html、2023年3月31日確認)

注3) 特定非営利活動法人ハート・プラスの会「活動記録」 (<https://www.normanet.ne.jp/~h-plus/keika.html>、2023年3月31日確認)

本稿は日本福祉のまちづくり学会第24回大会における口頭発表「障害に関連するマークの認知度と理解—大学生を対象とする調査結果からの考察—」の発表要旨に加筆修正したものである。発表に際し、貴重なご意見をいただいたことに感謝する。

参考文献

- 植田瑞昌・長谷川万由美・八藤後猛・牟田聡子(2016)「子育てに関するマーク・サインの認知度—公共空間におけるシンボルマークに関する研究」第19回日本福祉のまちづくり学会大会発表概要集
- 坂下晃祥・立花直樹(2011)「障害関係シンボルマークに対する大学生の認知に関する一考察」総合福祉科学研究(2)、137-152

社会システム株式会社(2020)『身体障害者補助犬の普及・啓発のあり方に関する調査研究報告書』全国盲導犬施設連合会(2020)「『盲導犬受け入れ全国調査』報告」

長谷川万由美(2018)「共生社会をめざした人権教育—「心のバリアフリー」に焦点をあてた福祉教育の実践的検討」を通しての考察」宇都宮大学教育学部研究紀要第68号第1部、3-20

長谷川万由美(2021)「バリアフリーに関するマークの認知度と理解—子育てに関するマークの理解内容の分析—」宇都宮大学教育学部教育実践紀要(8)、3-10

2023年3月31日 受理

Awareness and Understanding
of Signs Related to Disability :
Investigation from the Survey of University Students

Mayumi HASEGAWA